

河原町埋蔵文化財調査報告書第17集

河原町郷原11号墳 発掘調査報告書

2004. 10.

鳥取県八頭郡河原町教育委員会

河原町埋蔵文化財調査報告書第17集

河原町郷原11号墳発掘調査報告書

二〇〇四・十

鳥取県八頭郡河原町教育委員会

河原町郷原11号墳 発掘調査報告書

2004. 10

鳥取県八頭郡河原町教育委員会

序

この報告書は、一般県道河原インター線整備事業に伴う、郷原11号墳の本調査の記録であります。

平成15年度に国庫補助金を受けて実施した同線予定ルート試掘調査の結果では、郷原11号墳を始め、郷原10号墳、三谷国ヶ谷遺跡、郷原石堂口遺跡、郷原地才工下平遺跡と、多くの遺跡が見つかっています。

このうち平成16年度は、工事の進捗に合わせてまず必要となった郷原11号墳の本調査を実施しました。本町では、これまで古墳の発掘調査を行ったことはありませんでしたが、調査の結果、郷原11号墳は古墳時代後期、600年代前半の古墳ということが判明し、河原町における当時の埋葬の様子などを知りうることができました。

中国横断自動車道・姫路鳥取線の関連事業として進められている一般県道河原インター線（3・6・1号高福西御門線）は、姫鳥線河原インターチェンジへのアクセス道であり、国道29号と国道53号を結び、高速道路網を補完する幹線道路として鳥取県が整備し、姫鳥線の開通までの一部供用開始が見込まれています。

当初、平成18年度開通予定で整備が進んでいた姫鳥線ですが、その後の紆余曲折があり、鳥取一智頭、大原一佐用の2区間が国と都道府県の負担で整備する新直轄方式による整備区間に決定しています。平成16年8月1日時点での智頭一鳥取間の進捗率は58パーセントで、平成22年度ごろには完成するものと期待されています。

河原町は古事記所載の八上姫のふるさとであり、町内には延喜式神名帳に記された式内社が5社現存するなど、太古から開けてきた私たちの誇りうる郷土です。しかし、平成16年11月1日には周辺9市町村が合併し、人口約20万人の新鳥取市が誕生する予定で、鳥取市河原町地区としての新たな歴史がスタートします。

今後、私たちのふるさと「河原町」の歴史や有形、無形の文化財が大切に後世へ伝えられるよう、地域の方々と共に、歴史文化を生かした誇りのある地域づくりが進められることを念願してやみません。

この調査に際しまして、用地関係者、作業従事者を始め、関係各位の格別なご理解とご協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。また、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの適切なご指導、ご助言をいただきながら調査を無事に終了し、本報告書が発刊できましたことに深甚なる感謝を申し上げます。

本報告書が、郷土理解と今後の調査研究の一助になれば幸いです。

2004年10月

河原町教育委員会

教育長 田 淵 暉 夫

例 言

1. 本報告書は、一般県道河原インター線整備事業に伴い、平成16年度に鳥取県八頭郡河原町大字郷原（郷原11号墳）について実施した埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本発掘調査は、鳥取県八頭地方県土整備局の委託を受け、河原町教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体	河原町教育委員会
調査担当	中道秀俊
主任調査員	松本 哲
調査員	松本真治
調査補助員	原 憲弘
整理補助員	井上三千代・富永真理子
調査指導・助言	鳥取県教育委員会事務局文化課 鳥取県埋蔵文化財センター
発掘作業員	中道育子・池長よね子・下田茂登子・八田显代・森田輝子
調査協力	三好範明・福田寛子・樋口友枝・伊藤恵美子・長谷弘恵
赤色顔料分析	株式会社パレオ・ラボ

4. 本書の編集・執筆は松本哲・松本真治が行った。
5. 本書に使用した遺構実測図、遺物実測図及び浄写は井上・富永が行い、遺構・遺物写真撮影は松本真治が行った。
6. 本発掘調査における珪藻分析と、顔料分析は株式会社パレオ・ラボが行った。
7. 本書に掲載した遺跡分布図の地形図は国土地理院発行の平成11年修正50,000分の1「河原」を使用した。
8. 本書に掲載した調査区位置図には国土基本図、河原町平面図5,000分の1を使用した。
9. 図面、写真、遺物は河原町教育委員会が保管する。
10. 本書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海拔高である。

凡 例

1. 本報告書における略称記号は下記のとおりである。
〈遺構名〉SX：古墳 SS：段状遺構 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 P：ピット
〈遺物名〉Po：土器
2. 本報告書における実測図は、下記の縮尺で掲載した。
〈遺構図〉全体図1/100、段状遺構1/40、掘立柱建物跡1/80、土坑1/20 ピット1/100
〈遺物〉土器1/3
3. 本報告書の遺物実測図の表示について、その断面は須恵器は黒塗り、土師器は白抜きとした。○>は砂流の移動方向を示す。また、挿図中の表示は下記のとおりである。
●土器

目 次

序 文	
例 言・凡 例	
目 次・挿図目次・挿表目次・図版目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の結果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 古墳	9
第3節 段状遺構と後背施設	13
第4節 掘立柱建物跡	14
第5節 土坑	15
第6節 その他のピット群	15
第7節 遺構外出土遺物	15
第4章 まとめ	
第1節 遺構について	17
第2節 遺物について	17
付 論	
須恵器内面の赤色顔料と須恵器・壺の内容物	

株式会社パレオ・ラボ

遺物観察表
写真図版



集合写真

挿図目次

挿図1	周辺遺跡分布図	2
挿図2	郷原11号墳位置図	3
挿図3	郷原11号墳調査前地形図・断面図	6
挿図4	郷原11号墳全体遺構図	7
挿図5	郷原11号墳遺構図	11
挿図6	郷原11号墳埋葬施設遺構図・出土土器実測図	12
挿図7	第1段状遺構と後背施設遺構図	13
挿図8	第1掘立柱建物跡遺構図	14
挿図9	第1土坑遺構図	15
挿図10	その他のピット群・遺構外出土土器実測図	16

挿表目次

挿表1	周辺遺跡一覧表	2
挿表2	その他のピット群計測表	16

図版目次

図版1	調査前状況、墳丘ベルト設定状況、墳丘側面状況、土層断面
図版2	主体部ベルト設定及び遺物検出状況、主体部完掘状況、土層断面
図版3	11号墳完掘状況、調査区完掘状況、加工段検出状況、加工段完掘状況、SK-01
図版4	SX-11主体部
図版5	SX-11、SX-11周構内（9～11）・SX-11（12）・遺構外（13～15）

第1章 調査に至る経緯

郷原11号墳の本調査は、一般県道河原インター線整備事業に伴って実施した発掘調査である。

平成14年度、河原町教育委員会に整備計画範囲内における埋蔵文化財の有無についての照会があった。これを受けて当教育委員会が鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事とともに着工予定区間にかかる範囲を踏査した結果に基づき、平成14年度及び平成15年度に試掘トレンチを設定し、調査を行った。その結果、当該地に設定されたトレンチより周溝を検出し、遺物も土師器が出土した。これにより、事業施工前の本調査が必要となり、関係者で協議し、平成16年6月から発掘調査を開始することとなった。

本調査の期間は平成16年6月4日から平成16年10月8日の間で、調査面積は222㎡である。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥取県八頭郡河原町は鳥取県東部のほぼ中央部に位置する。東は八頭郡郡家町、船岡町、西は気高郡鹿野町、東伯郡三朝町、南は八頭郡用瀬町、佐治村、北は鳥取市に接しており、鳥取市と山陽地方を結ぶ国道53号線が、本県三大河川の一つである千代川に平行しながら町を縦断する形で走っている。千代川とその支流である八東川、曳田川とが合流する付近に広がる町東域の沖積平野に集落、耕地が集中しており、町の西方は急峻な山岳地帯が広がる。千代川流域と八東川下流域の平野部を除けば、本町の平坦地は狭小であり、山地部は西方ほど高く峻険で壮年期地形をなす。耕地は、平坦地を主とした水田地帯のほか、比較的比高の低い山地部を有効に利用した果樹園、畑地、放牧場などに土地を利用している。

河原町を南北に縦断する千代川は、源を中国山地の沖ノ山に発し、河原町で八東川、曳田川、私都川の三支流を合わせ、幹線流路延長56.8km、流域面積1,193km²に及ぶ山陰地方屈指の河川である。その絶えることない豊かな水の流れば、大昔から農業用水、水上輸送、水産資源など、河原町をはじめとする流域住民に限りない恩恵を与えて現在に至る。千代川に生息する魚介類のなかでも、淡水魚の王者として人々に親しまれている鮎は、古くから河原町の名産として有名である。

河原町の地質は、長い地質時代を経て解析の進行した千代川の中流域にあって、谷底平野の北端付近から東西方向に発達する流域に位置している。地質学的に見ても、鳥取県東部の地史を代表する各時代の地層に富み、かつ多様な岩石でできている。

郷原11号墳は河原町の東側にあり、八東川へと合流する三谷川の中流域付近の南側に広がる丘陵の舌状に延びた狭小な低陵上に位置する。三谷川の中流域を挟んで南北2地区に分布する郷原古墳群のうちの1基にあたる。

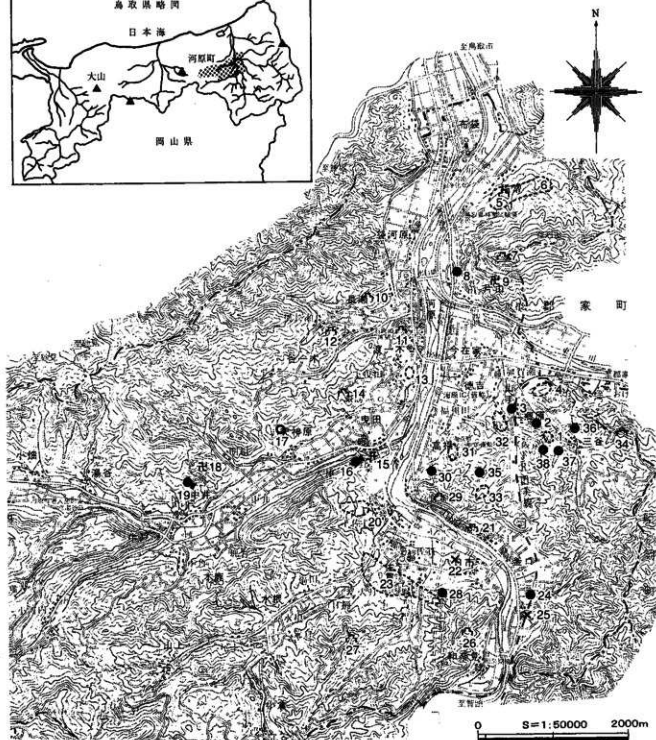
第2節 歴史的環境

河原町は千代川の主流に八東川・曳田川の支流が合流する地点にあり、古くから人が居住し文化の栄えた町である。

縄文時代に関するものとしては、ほとんど出土例がなく郷原地区の前田遺跡から縄文土器1片と、釜口地区の下中遺跡から細片を出土しているにとどまる。

弥生時代に関するものとしては、弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡である郷原地区の前田遺跡から弥生土器数点と、遺物散布地である今在家の土土居遺跡から弥生中期の土器が数片確認されている。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての資料としては、郷原遺跡、山手森谷上分遺跡で11棟の竪穴住居跡と多数の土器が検出されている。

古墳時代になると、町内でも丘陵や山裾に古墳が築造されるようになる。河原町のシンボルである壺

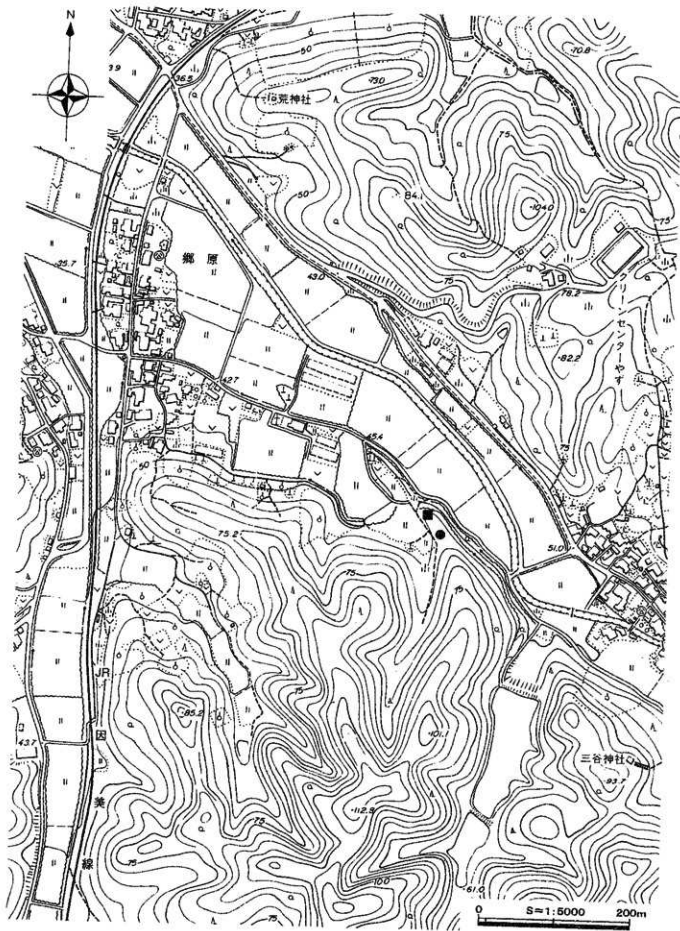


挿表1 周辺遺跡分布図

- 凡
- x 遺物出土地
 - 古墳群
 - 前方後円墳
 - 遺跡
 - 宮跡
 - 例
 - 卍 神社

1 郷原古墳群	2 郷原遺跡	3 前田遺跡	4 加賀瀬古墳群	5 桶常城跡
6 桶常古墳群	7 嚴勝寺山城跡	8 片山遺跡	9 嚴勝寺旧跡	10 長瀬城跡
11 丸山城跡	12 下山城跡	13 渡一木古墳群	14 大振袖山城跡	15 式内社亮沼神社
16 鑑古墳	17 天神原須磨器窯跡	18 羽黒山妙玄寺跡	19 中井1号墳	20 大平古墳
21 釜口城跡	22 八日市瓦葺出土地	23 佐貫古墳群	24 下中遺跡	25 釜口銅鏡出土地
26 折形城跡	27 木崎城跡	28 佐貫上台遺跡	29 高津原城跡	30 高福大符集遺跡
31 高福古墳群	32 山手古墳群	33 山手古墳群	34 三谷所在城跡	35 山手施工ノ谷上分遺跡
36 三谷園ノ谷遺跡	37 郷原石堂口遺跡	38 郷原地才工下平遺跡		

挿表1 周辺遺跡一覽表



挿図2 郷原11号墳位置図

石山（標高334m）は、鳥取平野南部の古郡家・六部山・空山古墳群など、大型の前方後円墳など多形で特色ある古墳群と連なっている。また、東部では郡家町の古墳集中地区の一つ福本古墳群等、千代川水系の古墳時代の奥津城として凝集地区であり、因幡地方の主要遺跡群といえる。

町内では、霊石山の北及び西へ延びる各支脈の山背を主に標高50～150mの位置に、町内最大の古墳群である稲常古墳群が存在する。また、南面の最勝寺旧参道を北へ300m登った付近には片山古墳群が所在する。なお、両古墳群の墳形はいずれも円墳である。

千代川へと合流する曳田川周辺には、左右両岸に散在して八上古墳群が存在する。そのうち、1号墳である嶽古墳は、築瀬山（283m）から北東に延びる尾根の先端にあり、眼下に下流一帯を見下す景勝の地に築造された全長50mの前方後円墳である。古事記によれば八上姫もしくは、八上姫を中心とした地方豪族の墓ではないかと伝えられている。築瀬山からは、大平古墳群も確認されている。嶽古墳より約500m南下した位置にあり、山頂から東方の下佐貫集落に向けて延びる丘陵の中腹に所在している。

下佐貫地区の南東方面にある佐貫地区には、佐貫地区を中心とする、水銀、八日市の山裾には7基の円墳などなる佐貫古墳群が存在し、そのうち1号墳からは、両軸式の横穴式石室より須恵器、馬具、耳環などの副葬品が出土している。また、嶽古墳より曳田川を4kmさかのぼった中井地区には、千代川流域では最大となる全長55mの前方後円墳の中井1号墳が所在する。

調査地である郷原地区には、八東川へと合流する三谷川の中流域付近を挟んで南北2地区に分布するかたちで郷原古墳群が所在する。今回、調査を行った郷原11号墳を含め12基の古墳が確認されている。

郷原古墳群の周辺には山手古墳群と加賀瀬古墳群の2つの古墳群が所在している。山手古墳群は、郷原11号墳の西方と南西には2地区に分かれて所在し、加賀瀬古墳群は北方の対岸の丘陵に所在する。

古墳以外の遺構としては、嶽古墳より曳田川を1kmさかのぼった曳田川左岸の丘陵斜面に、6世紀後半～末葉にかけて3基以上の窯が操業していたと考えられる天神原須恵器窯跡が存在する。

律令時代の八上郡に関する記述は『公卿補任』宝亀3年（772）の条と、宝亀5年（774）2月紀に名が見える。因幡には2,500戸が存在し、そのうち八上郡に600戸以上があったといわれ、この地の開拓が最も進んでいたと推測される。大同3年（808）に八上郡と智頭郡の駅馬が減らされたという内容の記述も見られ、山陽へ連絡する交通路も当時より開けていたことが窺われる。

この時期には、郷原地区の前田遺跡、郷原遺跡で集落跡が見つかっており、郷原遺跡では10棟の掘立柱建物跡、櫓列などの他、単弁7葉蓮華文軒丸瓦が出土している。また、釜口所在の下中溝遺跡からは土馬や獸形土製品が検出されている。

平安から鎌倉時代にかけて、古代の国郡里制から荘園・公領支配へと体制が移行するなかで、因幡において律令の郷体制があまり変動しないまま中世郷に発展したものと思われ、在地領主が郷司・保司というかたちで国衙支配にあたった。町内には、平安朝以降鎌倉期までに知られた荘園として、高山山領岩田荘がある。枳形山にある枳形城は、福良兵部小幡実滋が長和元年（1012）ころ、古城の跡を切り抜けて近郷を領有し、在城したといわれている。

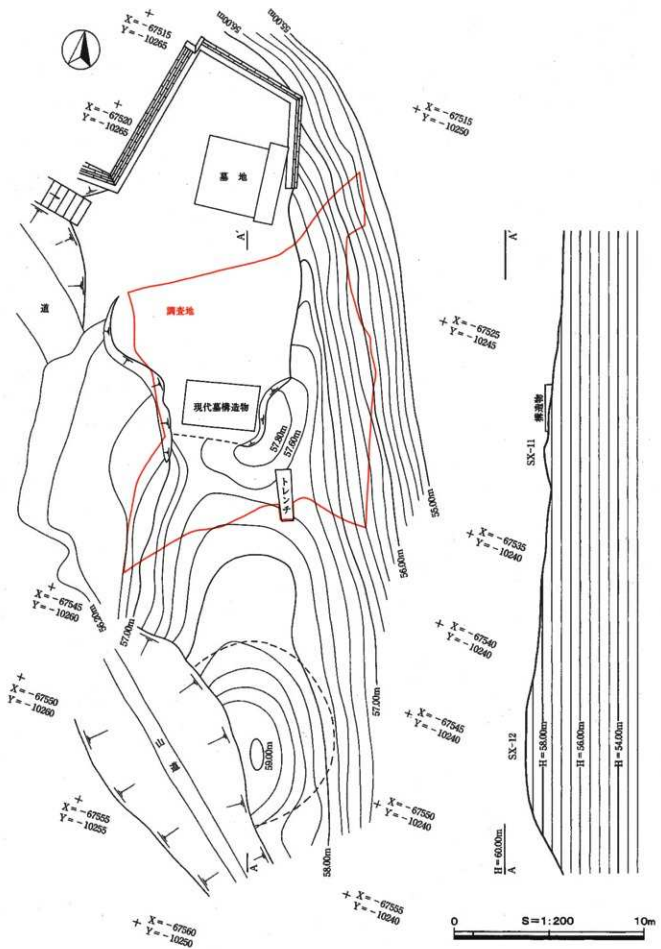
室町時代になると、商業が広く行われるようになり、行商や不定期市、常置の市、定期市といった市が発達した。本町にある六日市、八日市の集落名や、市場尻（郷原）、市場河原（片山）という地名はこの時代の市の名残ではないかと考えられる。この時代の遺跡としては、郷原地区の前田遺跡から12棟の屋敷跡が検出されており、備前、瀬戸、青磁、白磁などの陶磁器が出土している。また、2基の井戸からは呪符や舟形木製品、漆碗などが出土している。

霊石山の中腹にある最勝寺は天暦10年（956）慈恵大師が来てこの山を継ぐが、在院わずか8年にして応和3年（963）示寂し、それ以来荒廃していたが、建久4年（1193）三河守源頼朝が当地に来たとき当山の頽廃をなげき修理を加え自らこの山に潜居したという。天神原と中井の境にある羽黒山妙玄寺からは正治2年（1200）のものとする経巻18巻が明和7年（1770）に掘り出されている。なお、最勝寺、羽黒山妙玄寺とも豊臣秀吉の因州征伐によって消失したと伝えられている。

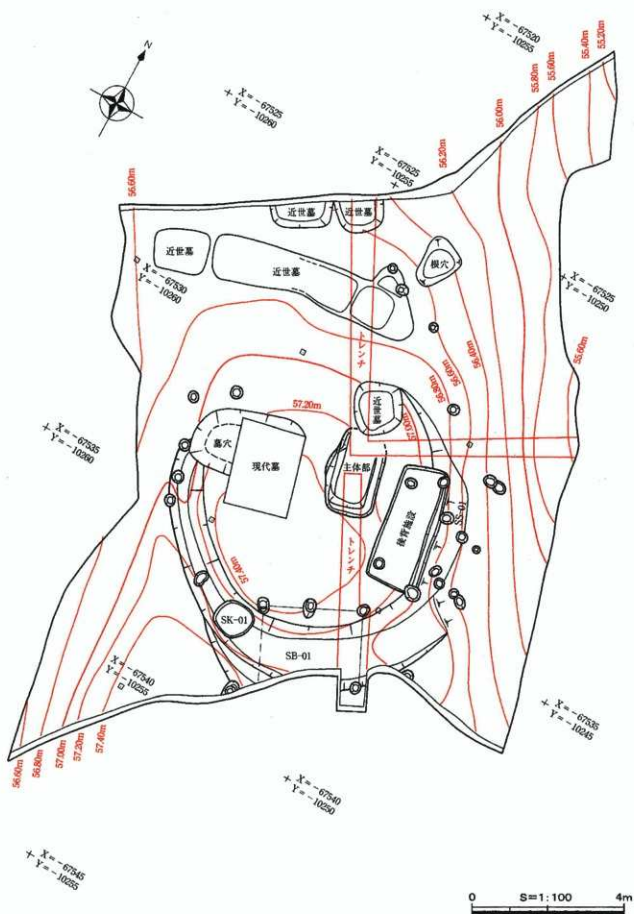
戦国期の本町に関係のある人物として武田高信と北村六郎左衛門があげられる。武田氏は、山名豊定の臣であったが、鳥取城を守るに及んでその要害を頼み、山名氏に叛き布施城を攻め一時は鳥取地方を鎮撫したが、山中鹿之助に追われて玉津鶴尾城に逃れ、やがてここも追われて天正6年(1578)佐貫の大義寺で謀殺されている。弓河内村の長であった北村氏は、秀吉当国攻略の時、郷民大半、毛利家へ志を通じていたが北村氏は当郷の百姓に秀吉軍の味方をさせた。天正8年(1580)、秀吉にその功を認められ、家来に召しかかえるということであったが、それを辞退した。そのため、永代国役を免ぜられ、宅地は免地となり、永代安堵の品及び感状を受けている。

参考文献

- 【河原町誌】河原町教育委員会 1986年
- 【河原町内遺跡発掘調査報告書】河原町教育委員会 2004年
- 【佐貫上台遺跡】鳥取県教育文化財団 2000年
- 【歴史時代の鳥取県】鳥取県埋蔵文化財センター 1989年



挿図3 郷原11号墳調査前地形図・断面図



挿図4 堀原11号墳全体遺構図

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査地は河原町の東側にあり、八東川へと合流する三谷川の中流域付近の南側に広がる丘陵の舌状に延びた狭小な低丘陵上に位置する。三谷川の中流域を挟んで南北2地区に分布する郷原古墳群のうちの一基にあたる。調査地の標高は約57.80～57.00mを測り、面積は約222㎡を測る。また、調査区の直ぐ南側には墳丘規模が推定で9m前後の円墳と考えられる郷原12墳が所在する。検出した遺構は古墳1基、段状遺構と後背施設1基、掘立柱建物跡1棟、土壇1本、ピット群である。遺物は、土器、石器であり、須恵器、土師器、陶器、石器が出土している。

なお、現地は墓地であるが、その一部が今回のインター線整備事業の対象に係る為、事前に対象となる調査地内の墓石、遺骨等を整備対象外の北側墓地に移動した後に、発掘調査を開始している。また、墓地の造成や近世墓の掘り込み等により、丘陵頂上部の大半が掘削を受けている状態であった。

第2節 古墳

郷原11号墳 (SX-01、挿図5、図版1・2・3)

位 置 調査地の丘陵根根上平坦面一杯を利用して造られている。墳丘の最大標高は57.90mを測る。本古墳上及び調査地北側にかけては墓地の造成による掘削がなされている。この掘削により、本古墳の1/4が消失している。また、調査区外にかかるため僅かではあるが周溝の南端部の検出はできなかった。

周 溝 周溝は墳丘の南側から西側平坦部と南東側斜面にかけて、山側に墳丘のほぼ半周を巡るように掘り込まれている。周溝は南側から南東側にかけての幅が広く、墳丘の東側は丘陵斜面側にかかるため、元々、巡らしてないものと考えられる。西側端部は墓の造成により消失しているため不明であるが、先端部と見られる一部分が検出されている。周溝の規模は南側で上面幅(検)1.28m、底面幅0.75m、深さ0.36m、南東側で上面幅1.48m、底面幅0.95m、深さ0.15m、西側で上面幅0.80m、底面幅0.25m、深さ0.18mで、断面形は皿状を呈している。墳丘の南側には、周溝内の外側に段がみられる。段の東側は調査区外にかかるため不明であるが、現況の形態から弧状を呈すると推測される。段は上面の検出規模が長辺(西一東)2.40m、短辺(北一南)最大0.72m、平坦面の検出規模が長辺(西一東)2.00m、短辺(北一南)最大0.38mを測り、平坦面と周溝底面との比高差は0.14mである。

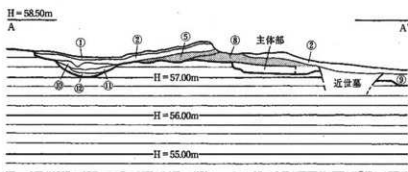
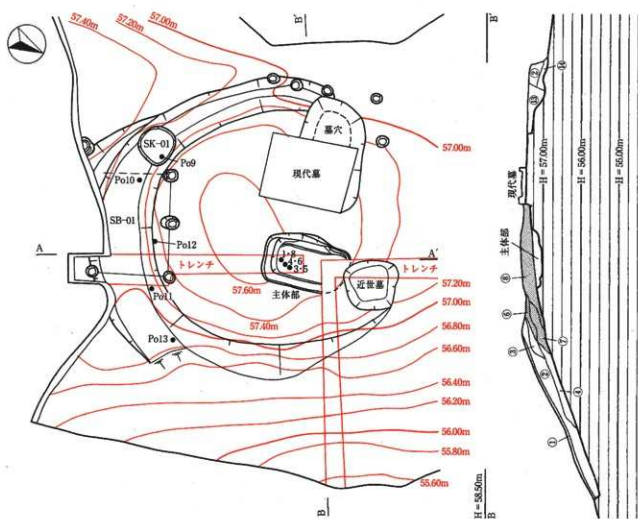
墳 丘 墳丘のほぼ中央から北側にかけては墓地の造成による掘削を受けており、墳丘全体の約1/2が消失している。残存状況より墳丘の平面形は円墳で、規模は長辺(西一東)7.30m、短辺(北一南)(残)5.4m、残存する墳丘高は周溝最下端から0.90m、墳丘盛土の最大厚は0.45mである。このことから、円墳である当墳丘の推定規模は、残存する墳丘及び周溝形態から直径7.00m程度になると考えられる。墳丘の築成をみると、旧表土は見られず地山面を平坦に整地し墳丘基盤面を造成し、その上に⑤～⑧層で墳丘盛土を積み上げている。

埋葬施設 墳丘部の中央からはずれて北北東寄り、墳丘基盤面から掘り込まれている主体埋葬施設を検出した。掘り込みは二段掘りを呈し、上段、下段ともに上面の平面形は(推)隅丸長方形である。規模は、上段の長辺(北一南)の上面が(推)2.25m、底面が(推)2.20m、短辺(西一東)の上面が1.45m、底面が1.18mを測る。下段の長辺(北一南)の上面が(推)1.92m、底面が(推)1.80m、短辺(西一東)の上面が0.84m、底面が0.80m、検出面から底面までの深さが0.26mを測る。主軸はN-81°-Wをとる。土層の堆積状況より棺痕跡と考えられる土層が確認された。このことから、木棺直葬墓と考えられる。棺の規模は(推)長辺(北一南)1.40m以上、短辺(西一東)0.75m、深さ0.17mである。棺痕跡の外側には棺

を固定するために敷き詰められたと考えられる層が見られた。また、床面が南側から北側へと若干、傾斜していることや、埋葬施設の南側底面には円形状の微かな凹みがみえ、供献品（1～8）もこの周辺に集中していたことから、被葬者の頭部は微かな凹みのある位置、つまり埋葬施設の南側に頭部を置き埋葬されていたものと考えられる。なお、墳丘部中央より西側にかけては、大きな現代墓の構造物が設置されているため、他の埋葬施設の有無は不明である。

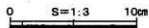
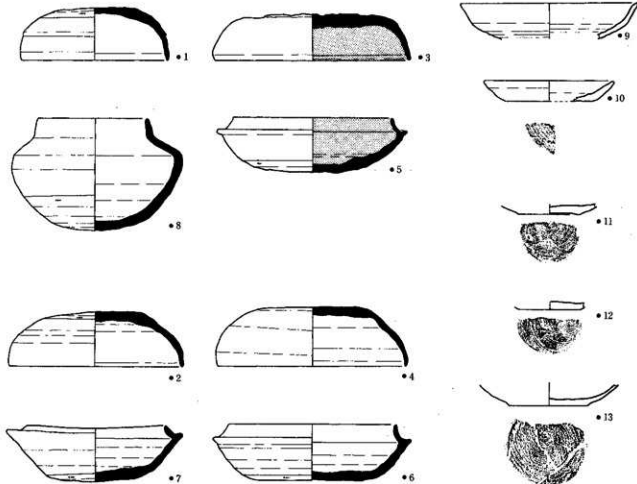
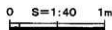
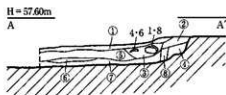
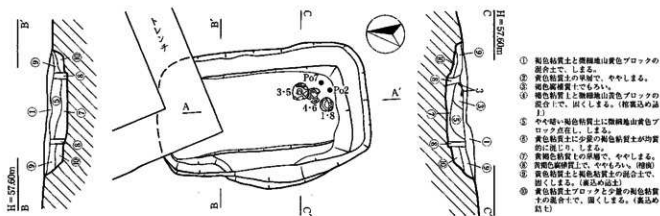
遺物 埋葬施設からは、全て棺内南西側に集中した状態で須恵器（1～8）が出土している。これらを詳細に見ていくと、まず、埋葬施設の最も南側からは、口縁部を天井方向に向けた須恵器・壺（8）に須恵器・蓋（1）を被せた状態で出土している。これより、約3cm空けて北側からは受け部を天井方向に向けた須恵器・坏身（6）に須恵器・蓋（4）を被せた状態で出土している。さらに北側からは、須恵器・蓋（4）の天井部の一部に須恵器・坏身（5）の底部が接しながら、受け部を天井方向に向けた須恵器・坏身（5）に須恵器・蓋（3）を被せた状態で出土している。この須恵器・蓋（3）・坏身（5）の内面一面中には赤色顔料であるベンガラが塗布されていた。詳細は付論に譲る。また、須恵器・蓋（1）と須恵器・壺（8）の直ぐ東側からは、須恵器・蓋（2）が、須恵器・蓋（4）と須恵器・坏身（6）の直ぐ東側からは、須恵器・坏身（7）が破砕した状態で出土している。須恵器・蓋（1）と須恵器・壺（8）、須恵器・蓋（4）と須恵器・坏身（6）、須恵器・蓋（3）と須恵器・坏身（5）は、それぞれがセット関係になっており、セット関係同士がほぼ南北方向に並んだ状態で、埋葬施設の底面より7～8cm以上浮いた位置から出土している。これらは土層観察から、埋葬時には棺の上に置かれて供献されていたが、その後の棺の腐朽により落下し、現レベル高に至ったと推測する。須恵器・蓋（2）・坏身（7）に関してもセット関係になると考えられる。また、出土状況から須恵器・蓋（2）・坏身（7）は、破砕してから供献された可能性が高い。須恵器・蓋（1）と坏身（5）（TK-43）は、それぞれ時期の違う須恵器・蓋（3）と壺（8）（TK-217）とセット関係で供献してあった。周溝内からは土層上位で、南側の墳丘寄りの位置から土師器・高坏（9）・皿（10）、南東側の墳丘寄りの位置から土師器・皿（11）が出土している。墳丘上からは、南側の墳丘傾斜変換点の上位より土師器・底部（12）が出土している。なお、周溝内、墳丘上遺物ともに破片である。

時期 主体部より出土している須恵器は時期差を持ち、TK-43並びにTK-217併行期のものが出土している。これらのものから7世紀前半と考えられる。



- ① 表土。
- ② 赤褐色粘質土で細粒よく入り、しめる。
- ③ 褐色粘質土と赤褐色粘質土の混合土に地山微細礫混じり、ややしめる。
- ④ 褐色粘質土に黄色地山ブロック混じり、しめる。
- ⑤ 褐色粘質土に赤褐色粘質土ブロック混じり、しめる。(墳丘盛土)
- ⑥ 褐色粘質土に黄褐色地山粘質土ブロック混じり、しめる。(墳丘盛土)
- ⑦ やや暗い褐色粘質土と褐色粘質土の混合土に黄色地山粘質土ブロック混じり、しめる。(墳丘盛土)
- ⑧ やや暗い褐色粘質土と厚さ10cmの黄色地山粘質土ブロックの混合土でしめる。(墳丘盛土)
- ⑨ 暗褐色粘質土に地山黄色土ブロック混じり、しめる。
- ⑩ 褐色粘質土に地山黄褐色粘質土ブロック点状し、しめる。
- ⑪ 褐色粘質土でしめる。
- ⑫ 褐色粘質土に少量の地山黄色粘質土ブロックが混じり、しめる。
- ⑬ 現代墓の埋め戻し土。
- ⑭ 褐色粘質土に微細灰化物点状し、しめる。

挿図5 郷原11号墳遺構図



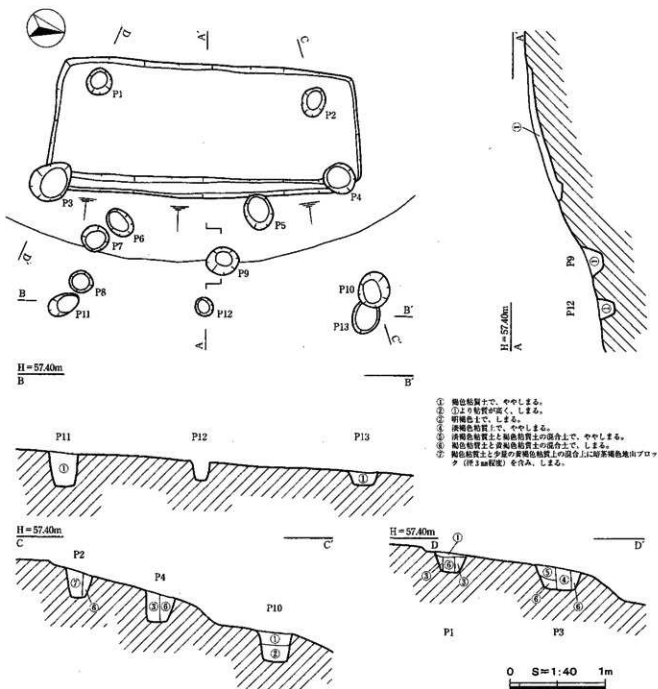
挿図6 郷原11号墳埋葬施設遺構図・出土土器実測図

第3節 段状遺構と後背施設

第1段状遺構 (SS-01、挿図7、図版3)

位置 調査区の東側の斜面部に位置し、0.70m南側にはSB-01 (P3) が存在する。本遺構の山側半分は郷原11号墳の墳丘基盤面の整地により掘削された状態で検出されている。検出面での平均標高は山側で57.25m、谷側で56.45mである。

形態 傾斜角24°を持つ山側と緩やかな斜面を持つ谷側の傾斜変換点を挟むように造成しており、山側面には後述する後背施設が存在する。傾斜変換点ラインであるが、現況では弧状にラインは延びているが、これは郷原11号墳築造時の墳裾部の造成による為であり、本遺構造成時には等高線に沿うように延びていたものと推測される。掘立柱建物跡等の復元のできたピットは、最も谷側にあるP11～13で、3本がほぼ南北方向に並んでいる。規模はP11 (0.30×



- ① 褐色粘質土で、ややしめる。
- ② ①より粘質が強く、しめる。
- ③ 明褐色土で、しめる。
- ④ 淡褐色粘質土で、ややしめる。
- ⑤ 淡褐色粘質土と褐色粘質土の混合土で、ややしめる。
- ⑥ 褐色粘質土と淡褐色粘質土の混合土で、しめる。
- ⑦ 褐色粘質土と少量の淡褐色粘質土の混合土に暗茶褐色地山ブロック (厚3mm程度) を含み、しめる。

挿図7 第1段状遺構と後背施設遺構図

0.22-0.33)、P12 (0.20×0.19-0.15)、P13 ((推) 0.35×0.29-0.14) mを測り、主柱穴間距離はP11~P12で1.25、P12~P13で1.46mを測る。その他にもP5~P10が検出できたが、掘立柱建物跡等の復元はできなかった。規模はP5 (0.37×0.30-0.23)、P6 (0.28×0.28-0.25)、P7(0.29×0.28-0.28)、P8(0.26×0.24-0.20)、P9(0.36×0.30-0.16)、P10(0.36×0.33-0.30) mを測る。

後背施設 本遺構の山側に位置する。後背施設は長辺(北-南)3.23m、短辺(西-東)1.45m、深さ0.08mの長方形の浅い掘り込みを持ち、床面は平坦ではなく傾斜角約17°の斜面を持つように造成してある。その谷側には布掘り状に幅0.24m、深さ0.16mの溝を長辺方向に巡らしてある。ピットは後背施設の山側両隅よりP1・2、谷側両隅よりP3・4の計4本が検出されている。なお、P3・4の位置は溝の両端部にあたる。規模はP1 (0.29×0.28-0.19)、P2 (0.31×0.26-0.26)、P3 (0.42×0.39-0.21)、P4 (0.33×0.32-0.28) mを測り、主柱穴間距離はP1~P2で2.00、P2~P4で0.55、P3~P4で2.68、P3~P1で0.75mを測る。この後背施設の性格は不明であるが、谷側に造られた施設を補助するような役割を担っていたのではないかと推測される。

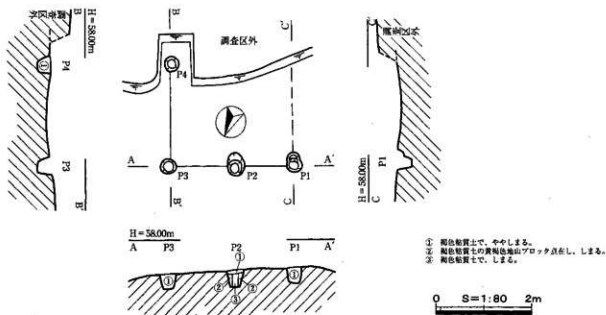
遺物 遺物は、土師器細片が数点出土しているが、図化できなかった。

時期 明確な時期は不明であるが、墳丘盛土層の下から検出されていることから、古墳築造時期である7世紀前半以前である。

第4節 掘立柱建物跡

第1掘立柱建物跡 (SB-01、挿図8)

南側に位置し、郷原11号墳と複合し床面は同周溝部がレンズ状に埋没した面となっている。直ぐ西側にはSK-01が存在する。検出面の標高は57.30mである。検出された柱穴は4本であるが、遺構の南側が調査区域外にかかるため、全ての柱穴は検出できていない。よって、規模等は不明であるが検出された柱穴の並びから、桁行2間×梁間1間以上の掘立柱建物跡であると推測される。検出できた各ピットの規模はP1 (0.42×0.30-0.32)、P2 (0.52×0.33-0.36)、P3 (0.32×0.32-0.32)、P4 (0.30×0.30-0.28) mを測り、柱穴間距離はP1~P2 (0.92)、P2~P3 (1.14)、P3~P4 (1.86) mを測る。周辺から回転糸切り痕を持つ土師器が出土していることから、平安時代のものと推測される。

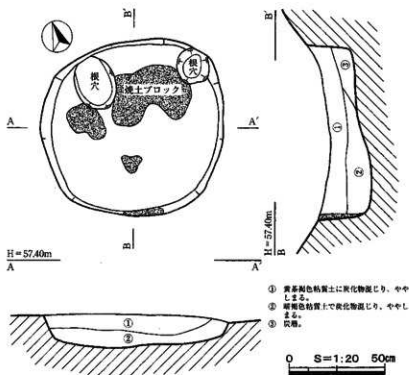


挿図8 第1掘立柱建物跡遺構図

第5節 土 坑

第1土坑 (SK-01、挿図9・図版3)

調査区南側に位置し、郷原11号墳の周溝部が完全に埋没しきらない時点で、そのレンズ状に堆積した周溝部に造られている。直ぐ東側にはSB-01が存在する。検出面での標高は57.10m、形態は上面、底面共にほぼ円形に近い隅丸方形を呈する。主軸はN-70°-Wをとり、規模は上面検出面で長軸（西—東）0.98m、短軸（北—南）0.94m、深さ0.16m、底面は長軸（西—東）0.89m、短軸（北—南）0.88mを測り、断面形は逆梯形である。埋土は3層に分層される。どの層からも炭化物が混合しており、底面からは焼土跡が確認できる。焼土跡は、特に底面の北半面に集中して見られる。また、南側壁面も高熱を受けたためよく焼けて赤色に変色している。以上のことから本遺構は屋外に造られた炉跡であったと推測される。時期は、周辺から回転糸切り痕を持つ土師器が出土していることから、平安時代のもつと推測される。また、本遺構は検出土層や周辺出土遺物などからSB-01と同時期のもので、関連する施設である可能性が考えられる。



挿図9 第1土坑遺構図

第6節 その他のピット群

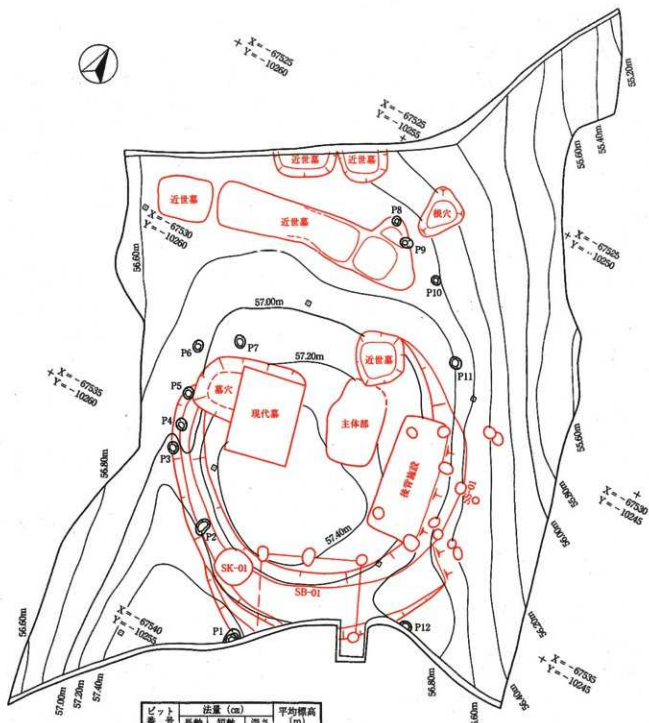
その他のピット群 (挿図10、挿表2)

調査区の関係などから建物の復元に至らなかったピット群が検出された。郷原11号墳西側や北東側近世墓周辺のP1~P12である。遺物はどのピットからも出土しなかった。そのため、時期は不明であるが、調査区内からは須恵器、土師器しか出土しておらず、古墳時代から平安時代の範疇と推測される。なお、その他のピット群の方位は挿表2に記す。

第7節 遺構外出土遺物

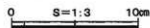
遺構外出土遺物 (挿図10、図版5)

調査区から遺構にかかわらない遺物として須恵器・高台 (14)、土師器・椀 (13)・高杯 (15) の破片が出土している。須恵器・高台 (14) は北側斜面部からの出土である。



ピット 番号	法量 (cm)			平均標高 (m)
	長軸	短軸	深さ	
P1	46	(横) 27	39	57.41
P2	42	24	12	57.14
P3	34	27	30	57.08
P4	30	28	20	56.78
P5	29	25	9	56.95
P6	28	27	22	56.93
P7	34	32	21	57.11
P8	22	21	18	56.61
P9	35	26	38	56.65
P10	28	25	17	56.61
P11	33	28	32	56.73
P12	30	(横) 16	22	57.04

挿表2 その他のピット群計測表



挿図10 その他のピット群・遺構外出土実測図

第4章 ま と め

第1節 遺構について

本遺跡が所在する丘陵は低丘陵で、山奥部の南側から派生し、北方向に途中地をはうように不整形に分岐しながら延びている。この中で調査区は最も北側に小さく突出した形をもつ低丘陵突端部に位置している。標高は57.80m～57.00mで、東側に隣接する水田部との比高差は約7～8mである。尾根幅も5～7mと狭く、本遺跡を取り巻く地形を概観すると、北西側から南東側に向かって細長く開けた谷底を利用した水田が接している。西側には同じく小さな谷地形を利用した水田が隣接している。

眺望は北～南東方向は八東川左岸に並行する形で延びる本丘陵より高く幅広い丘陵により塞がれ、この丘陵の山越しに、仰ぎ見る形で千代川と八東川の合流点にひるがえる標高334mを測る霊石山の台形状頂きが姿を現わす。北西側は眼下に河岸段丘が塞ぎ、千代川が間近にあるにもかかわらず、流域は全く見えない。したがって、前述した谷底に開けた細長い水田部を眼下にするのみである。調査区内の約1/2は現在、墓地として使用され、その平地面には現代墓の構造物がある。

調査の結果、古墳1基、掘立建物跡1棟、段状遺構とその後背施設1基、土坑1基が検出された。ここでは古墳について概観する。

(郷原11号墳) 尾根上平坦面幅が7mほどのやせ尾根上に造られた円墳で、規模は径7.3m、高さは周溝底から0.9mの7世紀前半の小規模古墳である。周溝は山側に約1/2巡らし、端部の様相から、元々谷側には巡らしていないものと考えられる。埋葬施設は墳丘上中央よりやや北寄りで地山掘削による二段掘りの木棺直葬墓1基を検出した。直ぐ西側は現代墓の構造物が占めており、この構造物周辺を精査したが、本古墳に伴う施設は全く検出できなかった。したがって、現況では埋葬主体が墳丘上にこの1基のみなのか、あるいは並葬する形で構造物の直下に造られていたかは不明である。

この木棺墓は掘り方2.25×1.45mで、棺部は1.40以上×0.75mである。また、床面は南側から北側に向かって若干の傾斜が付くことと、棺部南端に小さな凹みが見られることから、頭位は南側と推測される。注目すべきは棺内南側で落下した状態で見つかった供献土器である。8個体がそれぞれ4つのセット関係を持つ須恵器で木棺の腐朽により落下し現位置を保ってはいないが、3つのセットは原形を保つ完形品である。このうち1セット(蓋と身)の内面にはそれぞれ一面に赤色顔料が塗彩されていた。鑑定の結果、ベンガラによるもので、原石は平地沼地の産出と判明した。また、中に塩等が納められていた可能性も探られたが、不明であった。棺内から出土した須恵器は陶邑編年TK-43とTK-217併行で時期差を持つものである。

なお、地区外直ぐ南側尾根上にも本古墳から7m程離れた1段高い所に径9m程の円墳(郷原12号墳)が認められる。その奥部は急にやせ尾根になっており、その他に古墳は見当たらない。したがって、現況では本古墳は小さな枝尾根突端部と言う制約された立地条件下に造営された、それなりの力を有する人物の墓、言い換えれば、小規模集落の中での実力者級のものとして大過なろう。

本遺跡ではその他に後背施設を伴う段状遺構が確認された。郷原11号墳の墳丘盛上下から検出されたものであるが、遺物が全く出土しなかったため、時期は明確ではない。

また、後背施設についても今のところ資料に乏しく、性格は不明である。

第2節 遺物について

郷原11号墳では、遺構内外から須恵器・土師器が出土しており、石器等は1点もない。ここでは遺構に伴うもの、遺構外出土を問わず、実測できた15点について記述する。

1. 須恵器(1～8・14) 坏蓋・坏身・短頸壺・高台部

(1)～(8)は郷原11号墳主体埋葬施設から出土した供献土器で、(1)・(2)～(6)・(8)の7点は完形品である。

- (1) は口径11.4cmを測る坏蓋で、口縁部と天井部との境は甘い突帯で区別され、突帯下には1条の沈線が巡る。口縁部は肉薄で端部内面にナデによる緩い段が付く。天井部には中心部まで3周半の丁寧な全面へら削りを施す。(8)とセット関係で出土している。
- (2) は口径14.0cmの坏蓋で、口縁部と天井部との境は丸く内湾し不明瞭。口縁部は肉薄で、内面に段はなく、端部はすぼまる。天井部は外周1周半へら削りし、その内側(中央部)未調整。(7)とセット関係。
- (3) は口径15.3cmの大型坏蓋で、口縁部と天井部との境は丸く内湾し不明瞭。口縁部は肉薄で、端部内面には沈線を入れ、明瞭な段が付く。天井部は2周へら削りし、中央部未調整。(5)とセット関係で内面一面に赤色顔料塗彩。
- (4) は口径15.0cmの大型坏蓋で、口縁部と天井部との境は丸く内湾し不明瞭。口縁部は肉薄で、端部内面にはナデによる段を意識した甘い稜が付く。天井部外面は全体が風化の為、調整不明。(6)とセット関係。
- (5) は口径12.6cmの坏身で、立ち上がりは肉薄、短めで端部は丸い。内面体部との境に押えで、強い沈線を入れる。受部は全体的に丸く仕上げ、外上方に突出。底部は中心まで3周半の丁寧な全面へら削り。内面一面に赤色顔料塗彩。
- (6) は口径13.2cmの坏身で、立ち上がりは短めで内湾し、(5)より肉厚。端部は丸い。内面体部との境に押えで、沈線状凹みを入れる。受部は水平方向に短く突出し、丸みを持つ。底部は平坦で安定し、2周へら削りし、中央部未調整。
- (7) は口径10.9cmの坏身で、壺形である。立ち上がりは短く強く内傾し、肉厚度は(6)と変わらない。端部は丸い。内面体部との境に押えで、沈線状凹みを入れる。受部はやや外上方に短く突出し、丸みを持つ。底部は中心に粘土痕が残る為、やや凸起し不安定で、1周半へら削りし、中央部未調整。
- (8) は口径8.60cmの短径壺で、口縁端部は丸い。胴部は上位肩位置で逆「く」の字形に屈曲し、屈曲部で最大径13.4cmを測る。外面胴部下位から5周の丁寧なへら削りし、中心部径1.8cmの範囲が未調整。

(14) 短めの肉薄な高台で、両端面で接地し、外面底部はナデ。

以上、須恵器は時期的にみると、(1)、(5)は陶邑編年TK-43に併行し、6世紀後半。(2)、(3)、(4)、(6)は陶邑編年TK-217に併行し、7世紀前半。(8)については肩の張り出しが胴部上位にあり、新相を示すことからTK-217併行と考えられる。なお、TK209~TK-217併行期は杯蓋、杯身共に最も小型化する時期と言われているが、当遺跡から出土したものは(3)が口径15.3cmと大型化している。隣町郡家町山の上窯跡群で出土したものの中にも口径15.2~18.4cmと大型のものがあり、形態、調整等に類似点が認められ、この時期、同じ八東川流域で使用された祭祀用土器の共通点が指摘できよう。

2. 土師器(9~13・15) 高杯・椀・皿

全て郷原11号墳南側周溝上層から出土したものである。

(9) は復口径14.0cmを測る高杯の坏部で、坏部中にナデによる甘い稜が付き、下位から底部に向かって強いナデによる3条の凹線状凹みが連続する。

(10) は復口径10.0cmの小皿で、口縁端部は丸みを持つ。外面底部回転糸切り痕。

(11)・(12) は皿か坏の底部。回転糸切り痕。(13) は椀の底部。回転糸切り痕。

(15) は高杯の脚柱部。内面紋り目、指頭圧痕跡。

以上、土師器を時期的にみると、高杯(9)は古墳時代後期頃。小皿(10)や底部(11)~(13)はいずれも底部に回転糸切り痕を持つ。底部に回転糸切り痕を持つ小皿の出現が平安京周辺では10世紀中頃と言われており、当遺跡で出土したものは、形態や特徴から11世紀以降とみて大過なからう。

須恵器内面の赤色顔料と須恵器・壺の内容物

藤根 久・黒澤一男 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

鳥取県八頭郡河原町の郷原11号墳の調査では、内面が赤彩された須恵器坏・坏身あるいは壺が出土した。なお、これらの須恵器坏・坏身および壺内には土壌が充填していた。

ここでは、赤色顔料の成分を調べるために蛍光X線分析を行った。また、内容物は、塩が入っていたことが予想されることから、土器内土壌の珪藻化石を調べた。なお、赤色顔料の分析は藤根、珪藻分析は黒澤がそれぞれ担当した。

2. 試料と方法

[赤色顔料分析]

試料は、須恵器坏 (No 1) の内面部分と須恵器坏身付着赤色物の2試料である (図版1および図版2)。

蛍光X線分析による成分分析は、(株)堀場製作所製X線分析顕微鏡XGT-5000Type IIを用いた。分析の仕様は、X線管径100 μ m、電圧50KV、電流自動、測定時間500秒で行い、定量分析は標準試料を用いないFP法 (ファンダメンタルパラメータ法) で行った。

[珪藻分析による内容物の検討]

試料は、坏身内土壌および内面付着赤色土、壺内土壌の3試料である。

試料は、適量取り出した後、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え、1時間してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。ピーカーに残った残渣を回収し、適量をカバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後、マウントメディア (封入剤) で封入しプレパラートを作成した。各プレパラートは、光学顕微鏡下400~1,000倍で観察し、珪藻化石の同定と計数を行った。なお、環境指標種群は、安藤 (1990) に従った。

3. 結果および考察

[赤色顔料分析]

蛍光X線分析では、いずれの試料においても鉄Feのほか、アルミニウムAl、ケイ素Si、イオウS、カリウムK、チタンTi、マンガンMn、ジルコニウムZrが検出された。

定量分析では、鉄は須恵器坏 (No 1) において74.62%、須恵器坏身付着赤色物において75.61%検出された (図版1および図版2)。

[珪藻分析による内容物の検討]

検出された珪藻化石は、淡水種のみで13分類群9属9種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め4種群である。

いずれに試料も、検出された珪藻数は少ない。少ない中でも、最下流河川性指標種群の*Cyclotella meneghiniana* がやや高率に出現した。坏身内付着赤色土では、比較的多くの種が検出され、*Eunotia pectinalis* var. *undulata* や *Pinnularia viridis* あるいは *Neidium iridis* などの沼沢湿地付着生指標種群が33%出現した (表1)。

なお、坏身の内面に付着する赤色土 (ベンガラの一部) を水で溶いて顕微鏡で観察したところ、棒状のバイブ状ベンガラが観察された。

4. 考察

一般的に赤色顔料は、辰砂からなる朱 (HgS)、赤鉄鉱からなるベンガラ (Fe_2O_3)、鉛を熔融酸化して製造された鉛丹 (Pb_3O_4) が知られているが (山崎, 2002)、鉄以外の水銀や鉛などの元素が検出されないことから (図版1および図版2)、これら赤色顔料はベンガラと考える。

なお、珪藻分析を行った際、須恵器坏身の内面付着赤色土を水に溶いて顕微鏡観察したところ、棒状のパイプ状ベンガラが観察された。

藤根・服部 (2000) は、密閉した状態で出土した蓋杯須恵器の内面に付着する粘上質物を観察したところ、海草に付着する珪藻化石 (藻場指標種群) が多産したことから、藻塩法などによる塩が入っていた可能性を指摘している。ここで出土した古墳内から出土した須恵器杯身あるいは壺についても塩が入っていた可能性が予想されることから珪藻化石を調べてみた。

しかし、坏身および壺内の土壌中の珪藻化石を検討した結果、先の藻場指標種群の珪藻化石は検出されなかったことから、坏身と壺内に塩が入っていたという証拠を得られなかった。

なお、坏身の内面に付着する赤色土 (ベンガラ) の顕微鏡観察では、沼沢湿地指標種群の珪藻化石が特徴的に検出され、パイプ状ベンガラも観察された。岡田 (1997) は、パイプ状ベンガラに珪藻が付着していることがあることを指摘し、ベンガラが崖端の湧水部や池中で沈殿したものを燃焼して作った可能性を指摘している。ここで使用されたベンガラは、沼沢湿地環境で形成された褐鉄鉱を利用したことが考えられる。

また、いずれの試料においても、河川環境などで見られる *Cyclotella meneghiniana* が共通して検出されたことから、河川下流域などの止水域の堆積物が関係していることが推定される。

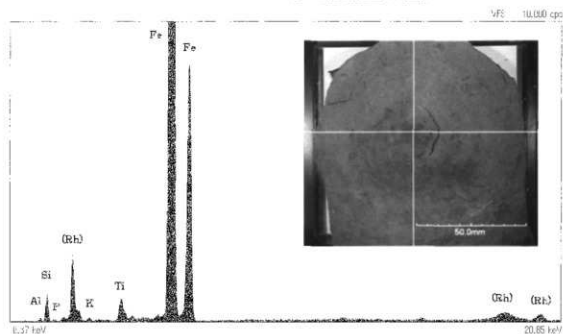
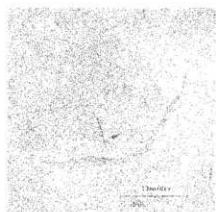
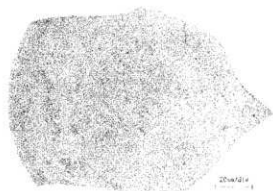
5. おわりに

郷原11号墳から出土した須恵器坏および杯身の内面に見られた赤色顔料はいずれもベンガラであることが分かった。さらに、坏身内面のベンガラは、沼沢湿地指標種群の珪藻化石が特徴的に検出され、パイプ状ベンガラも観察されたことから、沼沢湿地などの環境で形成された褐鉄鉱を利用したことが考えられる。

なお、須恵器坏身と壺内の土壌あるいは付着土中の珪藻化石を検討した結果、藻塩法などに起因する珪藻化石は全く検出されなかったことから、塩が入っていた証拠を得ることはできなかった。

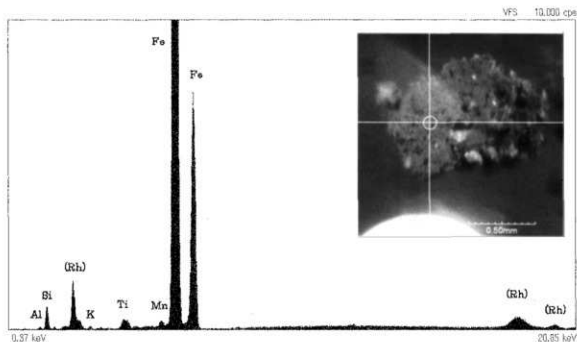
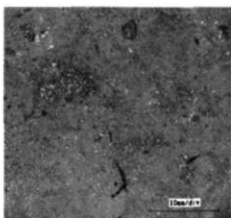
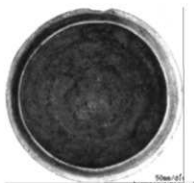
引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、73-88。
藤根 久・服部哲也 (2000) 密閉して出土した須恵器蓋坏内の内容物—塩利用の証拠—。日本文化財科学会第17回大会研究発表用旨集、116-117。
岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、38-39。
山崎一雄 (2002) 古文化財の科学。株式会社思文閣出版、352p。



須恵器杯1赤色顔料	元素	Z/A	質量濃度 [%]	Zo [%]	強度 [cps/eA]	化学式	質量濃度 [%]
測定時間 : 500 s	13 Al	X	2.65	0.65	8.28	Al ₂ O ₃	4.63
ペリス処理時間 : P4	14 Si	X	8.57	0.45	78.96	SiO ₂	18.34
EGT径 : 100 μm	15 P	K	0.43	0.14	8.47	P ₂ O ₅	0.99
X線管電圧 : 50 kV	19 K	K	0.24	0.05	10.85	K ₂ O	0.29
電流 : 0.12 mA	22 Ti	K	0.60	0.05	71.91	TiO ₂	1.06
定量補正法 : スタンダードレス	25 Mn	K	0.06	0.03	9.03	MnO	0.07
	26 Fe	K	62.19	0.92	8166.78	Fe ₂ O ₃	74.62
	40 Zr	K	0.05	0.02	7.70	ZrO ₂	0.07
	8 O	-	35.41	0.89	-	-	-

図版 1. 須恵器杯1内の赤色顔料とその成分分析結果

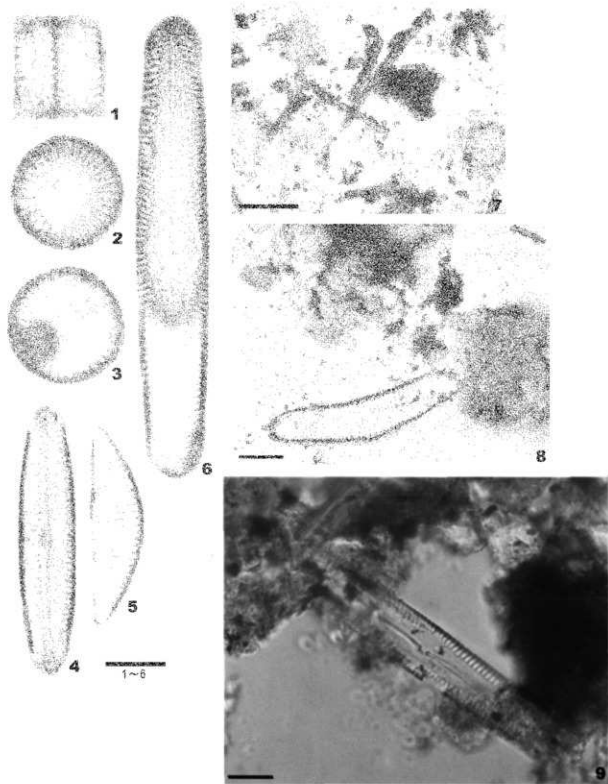


須恵器杯身内面赤色顔料粒子測定	元素	ライン	質量濃度 [%]	Z _{eff} [%]	強度 [cps/mA]	化学式	質量濃度 [%]
測定時間 : 500 s	13	Al K	2.20	0.69	7.54	Al ₂ O ₃	4.15
バック処理時間 : P4	14	Si K	8.51	0.49	77.98	SiO ₂	18.21
XGT倍 : 100 倍	15	P K	0.47	0.15	9.11	P ₂ O ₅	1.07
X線管電圧 : 50 kV	19	K K	0.25	0.06	11.50	K ₂ O	0.30
電流 : 0.10 mA	22	Ti K	0.28	0.04	32.53	TiO ₂	0.46
定基準正法 : スタンダードレス	25	Mn K	0.13	0.03	21.15	MnO	0.17
	26	Fe K	52.89	0.99	8273.01	Fe ₂ O ₃	75.61
	40	Zr K	0.01	0.03	1.83	ZrO ₂	0.02
	8	O	35.26	0.95			

図版 2. 須恵器杯身内の赤色顔料とその成分分析結果

表1 郷原11号墳出土坏身および壺内土壌の珪藻化石産出表
(種群は安藤 (1990) に基づく)

		坏身内		壺内
		付着土	充填土	充填土
<i>Cyclotella meneghiniana</i>	L	7	5	12
<i>Cymbella minuta</i>	W	—	—	1
<i>Cymbella naviculiformis</i>	O	1	—	—
<i>Epithemia</i> spp.	?	—	—	1
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	O	2	—	—
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	—	—	1
<i>Navicula pupula</i>	W	1	—	—
<i>Neidium iridis</i>	O	2	—	—
<i>Nitzschia</i> spp.	?	—	1	—
<i>Pinnularia gibba</i>	O	1	—	—
<i>Pinnularia microstauron</i>	W	1	—	—
<i>Pinnularia viridis</i>	O	3	—	—
<i>Pinnularia</i> spp.	?	3	1	—
最下流性河川	L	7	5	12
沼沢湿地付着	O	9	—	—
陸	Q	—	—	1
広布種	W	2	—	1
不明種	?	3	2	1
合 計		21	7	15



図版3. 検出された珪藻化石とパイプ状ベンガラの顕微鏡写真 (スケール0.01mm)

- 1~3. *Cyclotella meneghiniana* (壺内土) 4. *Pinnularia viridis* (坏身内)
 5. *Cymbella minuta* (壺内土) 6. *Pinnularia gibba* (坏身内)
 7. パイプ状ベンガラ (坏身内付着土)
 8. パイプ状ベンガラと珪藻 (*Eunotia pectinalis* var. *undulata*; 坏身内)
 9. パイプ状ベンガラと珪藻 (*Pinnularia gibba*; 坏身内)

遺物觀察表

器種	土器番号	種別	図版	法量 (cm)	形 態	手法上の特徴	胎 土	焼成 保存	色 調	出土位置
須恵器 坏蓋	1	6	4	口径 11.4 器高 4.1	(完形品) 口縁部はやや外方に下垂し、口縁端部はすぼまり、内面にナデによる細い段が付く。口縁部と天井部との境はナデによる甘い変帯で区別される。変帯下に一条の沈線を施す。天井部は平坦。	(外面) 回転横ナデ。天井部中心まで3周半の丁寧なヘラ削り。 (内面) 回転横ナデ。天井部中央不正方向の仕上げナデ。	径1~2mm以下の長石、石英などの砂粒点状。	良好	内外面共に淡灰色	SX-11 主体部
須恵器 坏蓋	2	6	4	口径 14.0 器高 4.3	(完形品) 口縁部は湾曲気味に下垂し、口縁端部はすぼまる。口縁部と天井部との境は丸く内湾し、不明瞭。天井部はほぼ平坦。	(外面) 回転横ナデ。天井部外周1周半のヘラ削り。中央部へラ切り未調整。 (内面) 回転横ナデ。天井部中央仕上げナデ。	径1~2mm前後の長石、石英、雲母などの砂粒均質的に含む。	良好	内外面共に濃青灰色	SX-11 主体部
須恵器 坏蓋	3	6	4	口径 15.3 器高 3.6	(完形品) 口縁部は湾曲して下がり、口縁端部はすぼまり、内面に一条の沈線を施し、明瞭な段が付く。口縁部と天井部との境は丸く内湾し、不明瞭。天井部はほぼ平坦。	(外面) 回転横ナデ。天井部2周のヘラ削り。中央部へラ切り未調整。 (内面) 回転横ナデ。天井部中央仕上げナデ。	径1mm以下の長石、石英などの砂粒均点状。	良好	内外面灰色 内面に赤色顔料塗彩	SX-11 主体部
須恵器 坏蓋	4	6	4	口径 15.0 器高 4.7	(完形品) 口縁部はやや湾曲気味に下がり、口縁端部で緩く内方に屈曲し、すぼまる。口縁部と天井部との境は丸く内湾し、不明瞭。天井部は平坦。	(外面) 口縁部回転横ナデ。他は風化の為、調整不明。 (内面) 回転横ナデ。天井部中央仕上げナデ。	径1mm以下の長石、石英などの砂粒均質的に含む。	やや良	外面淡灰褐色 内面淡灰色	SX-11 主体部
須恵器 坏身	5	6	4	口径 12.6 器高 4.3	(完形品) 立ち上がりは薄く短めで、湾曲気味に内傾し、肩部は丸く納める。内面体部との境に、押えで強い沈線を施す。受部は全体的に丸く仕上げ、外上方に突出する。底部は中心部はほぼ平坦。	(外面) 回転横ナデ。底部中心まで3周半の丁寧なヘラ削り。 (内面) 回転横ナデ。底部中央仕上げナデ。	径6mmの長石1点と、径1mm以下の長石、石英などの砂粒点状。	良好	内外面共に淡青灰色 内面に赤色顔料塗彩	SX-11 主体部
須恵器 坏身	6	6	4	口径 13.2 器高 4.4	(完形品) 立ち上がりは短く短めで、湾曲気味に内傾し、肩部は丸く納める。内面体部との境に、押えで沈線状凹みが付く。受部は水平方向に短く突出し、丸味を持つ。底部は平坦で安定する。	(外面) 回転横ナデ。底部外周2周のヘラ削り。中央へラ切り未調整。 (内面) 回転横ナデ。底部中央仕上げナデ。	径1mm以下の長石、石英、雲母などの砂粒均質的に含む。	やや良	内外面共に淡灰色	SX-11 主体部
須恵器 坏身	7	6	4-5	口径 10.9 器高 4.4	(完形品) 全体的にやや重。立ち上がりは短く、強く内傾し、肩部は丸く納める。内面体部との境に、押えで沈線状凹みを持つ。受部はやや外上方に短く突出し、丸味を持つ。底部は中心がやや凸起し、不安定。	(外面) 回転横ナデ。底部周辺1周半のヘラ削り。中央へラ切り未調整で、粘土痕残る。 (内面) 回転横ナデ。底部中央仕上げナデ。	径1mm以下の長石、石英、雲母などの砂粒密に含む。	良好	内外面共に濃灰色	SX-11 主体部
須恵器 短頸壺	8	6	4-5	口径 8.6 器高 8.7 最大 肩径 13.4	(完形品) 口縁部は頸部からやや内傾気味に立ち上がり、肩部は丸く納める。胴部は上位で逆「く」の字形に屈曲し、屈曲部で最大径を測る。底部は中心部がやや凸起し、不安定。	(外面) 口縁部~胴部回転横ナデ。胴部下位から5周の丁寧なヘラ削り。中心部へラ切り未調整。 (内面) 回転横ナデ。底部中央仕上げナデ。	径2mm以下の長石、石英などの砂粒均質的に含む。	良好	内外面共に灰色 ~淡灰色	SX-11 主体部
土師器 高坏	9	6	5	復口径 14.0	(坏部破片) 口縁部は外傾して立ち上がり、肩部でややつまみ上げ、突る。坏部中位にナデによる甘い段が付く。下位に強いナデによる三条の凹線状凹みが連続する。	内外面共に横ナデ。	径1~2mm以下の長石、石英、雲母などの砂粒含む。	良好	内外面共に橙黄褐色 断面淡黄褐色	SX-11 周溝内

出土遺物観察表(1)

器種	土器番号	挿図	図版	法量 (cm)	形 態	手法上の特徴	胎 土	焼成 保存	色 調	出土位置
土師器 皿	10	6	5	復口径 10.0 復底径 7.0 器高 1.7	(体部～底部破片) 体部は外傾して立ち上がり、口縁端部は丸味を持つ。外面底部に回転糸切り痕。	内外面共に横ナデ。	径1mm以下の長石、石英などの砂粒含む。	良好	内外面共に濃茶褐色	SX-11 周溝内
土師器 皿	11	6	5	復底径 4.8	(底部破片) 底部に回転糸切り痕。	内外面共に横ナデ。	径1～2mm以下の長石、石英、雲母などの砂粒少し含む。	良好	内外面共に濃茶褐色	SX-11 周溝内
土師器 底部	12	6	5	復底径 5.6	(底部破片) 底部に回転糸切り痕。	内外面共に横ナデ。	径1ミリ以下の雲母、長石などの砂粒点在。	良好	内外面共に淡褐色	SX-11
土師器 碗	13	6	5	復底径 6.2	(体部～底部破片) 体部は腕状に立ち上がり、口縁部欠損。底部は安定した平底で、回転糸切り痕有り。	内外面共に横ナデ。	径1mm以下の長石、石英などの砂粒含む。	良	内外面共に淡褐色 白色	SX-11
須恵器 高台	14	10	5	復底径 7.2	(高台破片) 高台は低く内縁ではほぼ下差し、両端面で接地。	(外面) 横ナデ (内面) 仕上げナデ。	径1mm以下の長石などの砂粒点在。	良好	内外面共に灰色	遺構外
土師器 高坏	15	10	5		(脚柱状破片)	(外面) 横ナデ (内面) 絞り目、指頭圧痕。	径1mm以下の長石、石英などの砂粒含む。	良	内外面共に淡黄茶褐色 断面茶黄色褐色	遺構外

出土遺物観察表(2)

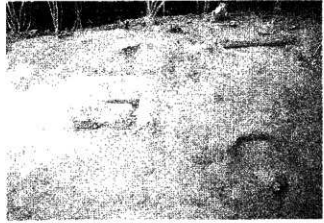
写真図版



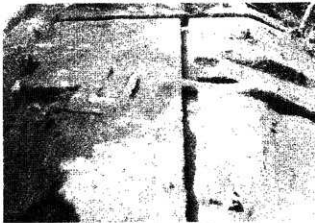
SX-11主体部出土遺物（左3、右5）



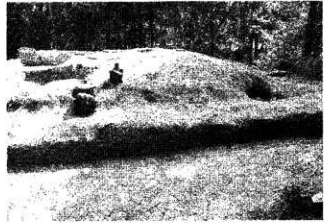
調査区前状況 (西より)



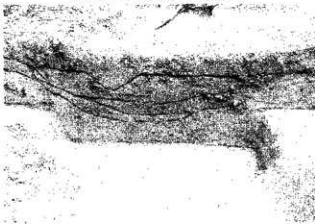
調査前状況 (南側より)



墳丘ベルト設定状況 (南より)



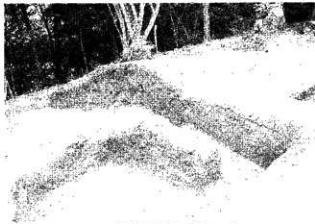
墳丘側面状況 (西より)



A-A' 土層断面 (岡溝・東より)



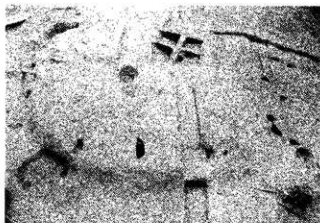
A-A' 土層断面 (東より)



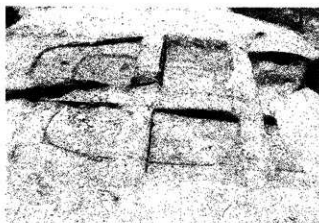
D-D' 土層断面 (北より)



F-F' 土層断面 (南より)



主体部ベルト設定状況（南より）



主体部ベルト設定及び遺物検出状況（東より）



主体部ベルト設定状況（東より）



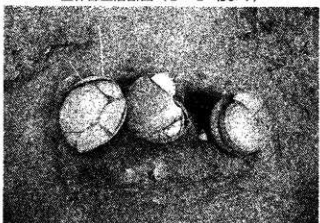
主体部土層断面（C-C'南より）



主体部土層断面（E-E'北より）



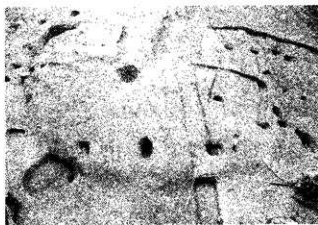
主体部遺物検出状況（西より）



主体部遺物検出状況（西より）



主体部完掘状況（西より）



11号墳完掘状況（南より）



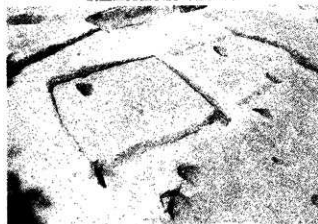
調査区完掘状況（西より）



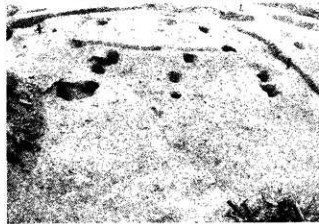
調査区完掘状況（北より）



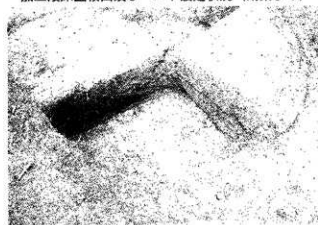
加工段検出状況（南東より）



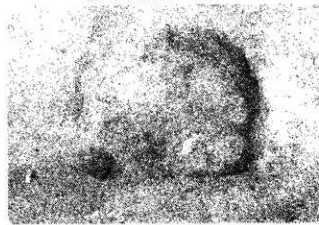
加工段床面検出及びベルト設定状況（南東より）



加工段完掘状況（東より）



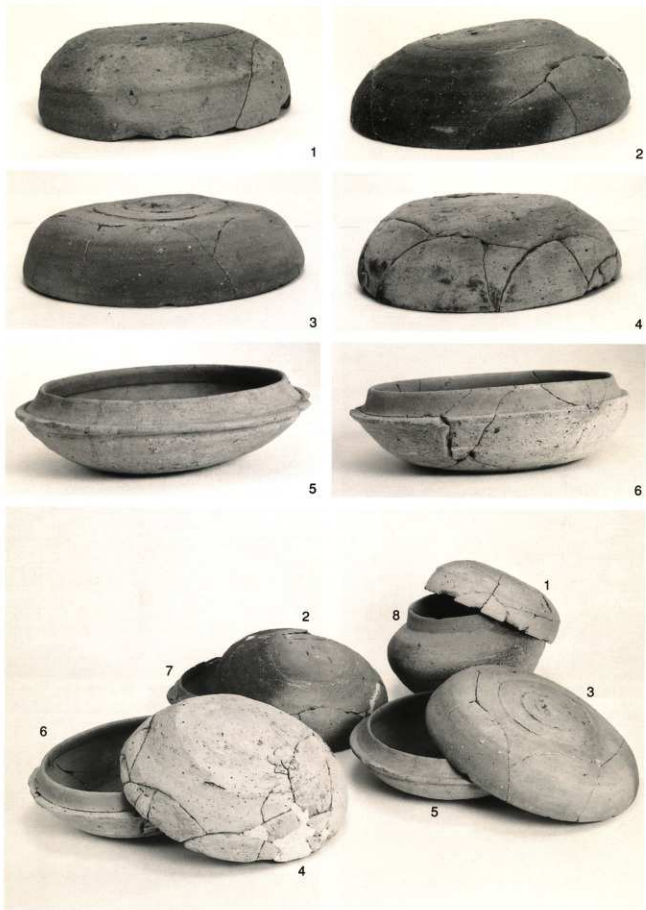
SK-01半載状況（北より）



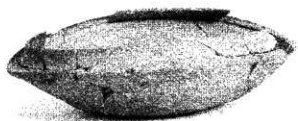
SK-01完掘状況（北東より）

图版 4

SX-11主体部



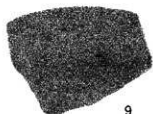
SX-11



7

8

SX-11周溝内 (9~11)・SX-11 (12)・遺構外 (13~15)



9



10



15



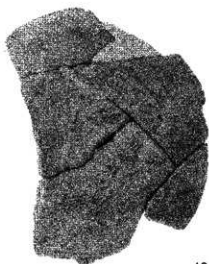
11



14



12



13

報告書抄録

ふりがな	かわはらちようごうばら11ごうふんはくつちようさほうこくしょ							
書名	河原町郷原11号墳発掘調査報告書							
副書名	一般県道河原インター線整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	河原町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編集者名	松本 哲 松本真治							
編集機関	河原町教育委員会							
所在地	鳥取県八頭郡河原町大字渡一木277番地							
	郵便番号	680—1221			電話番号	0858—76—3122		
発行年月日	西 暦	2004年10月 8 日			年 号	平成16年10月 8 日		
ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町 村	遺跡 番号					
郷原11号墳	鳥取県八頭郡河原町 大字郷原字カル山 384, 385地先	31323	232	35°23'24"	133°13'25"	20040604 、 20041008	222m ²	一般県道 河原インター線整 備事業
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
郷原11号墳	古墳	古墳時代		古墳 段状遺構と後背施設 掘立柱建物跡 土坑		須 志 器 土 師 器		内面赤色顔料塗彩 の須志器坏身・蓋 坏

河原町埋蔵文化財調査報告書 第17集

鳥取県八頭郡河原町

河原町郷原11号墳発掘調査報告書

発行 2004年10月 8日

編集 河原町教育委員会

〒680-1221

鳥取県八頭郡河原町大字渡一本277番地

電話 (0856) 76-3122

発行者 河原町教育委員会

印刷 勝美印刷株式会社